

ませんから、日本のロータリー会員としては
今まで通りの意識と行動を維持すればよく、
私のクラブなどは迅速な対応例だと理解した
いところでは。

しかしそうした見方が通用するのは、欧米
の会員、ならびにその文化圏に属する人々の
生き方との密接な関係にある世界ならではの
話でしょう。その原因の一つは、言葉と人間
の関係にあります。

欧米文化圏の人たちはメッセージや目的
を策定する際、言葉を使って表現します。彼
らにとつての言葉とは、「はじめに言葉あり」
とヨハネが宣して以来、即ロゴス（理性、世
界に通用する概念、ロータリーの目的）であ
り、言葉に従うことは理性、真理そのものに
従うことを意味します。

それに対し私たち日本人は、言葉は方便と
心得る場合が少なくなく、自分たちで定めた
目的ですら、心に刻み込んで日々達成しよう
と励む人は少数派に属します。例会場に「ロー
タリーの目的」「四つのテスト」を掲示した上、
月に何度かの唱和が会員の緊張感ある実践意
欲を鼓舞できるかは、甚だ疑問です。

もう一つの生き方の問題は、私たちと欧
米人では時間の捉え方が異なる点です。時の
流れ循環型と考える日本文化と、始めと終わ
りのある発展を大前提とする直線型である欧
米のキリスト教文化型では明らかに異なりま
す。役職の人事に単年度方式を貫き、各種会
合の要点が『手続要覧』や事業計画に規定され
るロータリー文化は、まさに後者に属します。

「綱領」から「目的」へ

倶知安 尾崎 春人

二〇一三年の『ロータリーの友』一月号で、
「ロータリーの綱領」などの日本語訳の改訂
が紹介されて一年がたちました。

私のクラブでも、今年度から例会場に
「ロータリーの綱領」から新しくなった「ロー
タリーの目的」が掲示され、新しくなった訳
を唱和しています。

日本語訳が一部直されたにすぎず、原文
(英語)は現時点では一字一句変更されてい

私たち日本人は、計画や予算作りには熱心
な反面、将来に属する途中の確認や、結果の
評価には甘く、責任を問いたがらないという
特徴があります。

以上の相違点を克服するため、「ロータ
リーの目的」の普及に合わせて意識改革が必
要と思われれます。「目的」を含め、文字化し
た理念は全て「約束事」と心得、信義に厚
く、義理(義務)を重んじる私たち日本人は
約束を果たすため日課の中に目的攻略戦術を
立て、着実に進め、結果は明鏡止水の心境で
評価し、公開を原則とすることです。新「和
魂ロータリー才」を提案します。

(第二五〇地区 北海道 学校経営)